

土地の記憶 ホシマリ

「土地の記憶」は土地固有の記憶を読み解く研究室。研究員のホシと南で活動。定期リサーチを行い、探った記憶をその土地にどう還元するかを考えつつける。ラジオと新聞を作成・発表。

そこに昔から住んでいるわけでもない「よそ者」が土地を舞台になにかしらのプロジェクトをはじめるとなれば、まず「土地の記憶」を読み解くことが必要なのではないか？ そんな疑問がいつのころからか浮かんでいた。

土地の名前がつくプロジェクトは多数存在する。ただ、主催者が「よそ者」であったり、たとえば文化芸術などなにかしらの特化した人間であればあるほど、妙に上から目線だったり、土地の名を借りているという意識がとても薄い気がするように感じていた。もちろんそれらすべてが問題だと言いたいわけではない。「よそ者」にしか見えないこと、「よそ者」だから発見できるよいこともたくさんある。少なからず、土地に根ざしていくことが目的のプロジェクトで、その土地からのなにかしらの支援を受けているものであるのなら、つなぎ手である側の人間は読み解く行為を大切にすべきではないだろうか。

そんな思いがきっかけで、土地に執着した研究室を立ち上げることにしたのは二〇一四

年のはじめのころ。とはいえ、偉そうに「土地の記憶」を読み解くことが必要だと考えてはいたものの、具体的な方法論をとくに持たなかったため、実際にこの研究室を通じて模索していくことにしたのだった。それが、「土地の記憶研究室」である。

そして「土地の記憶」という言葉に興味を持ってくれた研究員の南と私の二人で、「記憶」をめぐる旅ははじまったのだった。ここでは、活動を振り返りながら、二人で共有した問題意識を当時の記録とともに記していきたいと思う。

住まう者としての意識

研究室をはじめたばかりのころ、私たち二人は東京という都市には住んではいなかった。私自身は、実家が東京の二三区なのだが、当時は千葉県のとある市に密着したまちづくりの会社に勤めていて、その市に住んでいた。その土地でやっていくのならば、「よそ者」としての目線と住まう者としての目線も必要だという思いと、東京という都市を客観的に見たくなくなったという思いが重なり、東京から千葉県に移り住んでいた。そして南もまた、東京には住んでいなかった。

まだお互いのことを知らなかったため、私たちは会合のあとには必ず日記のように思ったこと・感じていたことを素直にテキストに記し合うことにしていた。そんなころに南が記

したテキストがとても印象的だったのを覚えている。その土地に住むということを、私たちは互いに強く意識していた。

私は東京に一度も住んだことがない。東京へ行く場所、遊ぶ場所であって住むところではないという感覚。しかし、高校、大学生となるうちに東京に行くことが増え、東京に住んでいる友人も増えてきた。

そうしたらだんだんと東京の居住区が見えてきて「あ、東京で住めるんだ」となんだかへんてこな感想が出てきた。住む場所でないと言っておきながら、いつかは東京に住んで東京で仕事がしたいという思いがある。そのときに、つくりかた研究所が立ち上がり参加した。

ではなぜ「土地の記憶」なのか。住むだけなら別に昔のことを知る必要はないのではな
いかという疑問が浮かぶと思う。

私は住むだけは嫌なのだ。隣に住んでいる人の顔も知らないなんて嫌なのだ。住むなら
できるだけその地域に馴染みたい。私の本当の居場所はどこではないと思いつながら住み
たくない。そう思う要因は、隣の顔どころか町内みんなの顔が見えていて回覧板が回っ

てごみ捨て場掃除の当番も回ってくる、そんなお互い気にし合う環境で暮らしているか
らだと思う。

東京では珍しいことなのかもしれないけれど、昔はみんなこんな感じだったのでは？
いまだってそれが残っている地区はわからないだけであるはず。それが二三区内にあつ
たらものすごく感動するしそこに住みたい。だからそういう「記憶」をほじくりだして
知り、昔からいる人には思い出として、新しく来る人には記録として「土地の記憶」を
感じてもらいたい。多分ご近所のごたごたがこれで少なくなるかもしれないし、土地の
研究が広まればもしかしたら東京のコミュニティが復活して、住みやすい（とくに私が）
まちができるのではないかなんて大きいことも思っている。

（二〇一四・六・二七 南とも子 記録より）

「よそ者」としての問題

リサーチを進めるために、「土地の記憶」を読み解くエリアを限定することにした。と
はいえ、絶対にこの場所で、という執着があったわけでもなかった。東京に点在する階段
に南が興味があったので、東京二三区なかで一番標高が高い所に行くことにした。それ

が、芝愛宕山だ。

ビル群が立ち並ぶその場所からは、かつては東京湾が見えたという。いまはまったく見ることはできないが、見えない東京湾を二人で感じようとした。愛宕山を中心とする地区をくまなく歩いた。二本の高い建物が建つ脇には、その土地の歴史を色濃く感じられる神社や仏閣、元ラジオ放送局、そして想像していた数よりも多い民家が建っていた。民家のある路地裏はともひっそりしていた。平日の昼間だから出かけている、そういうひっそりではない。ゴーストタウンのような静けさがそこには満ちていた。住まう者はもういない、そんな場所だった。

偶然にも、はじめて訪れたその地は、再開発のプロジェクトが進んでいる経済特区で、あたらしく生まれ変わろうとしている場所だったのだ。東京で住むということを意識していた私たちは、この地にただならぬ縁を感じた。

それから、二週間に一回、テーマを決めては愛宕山で待ち合わせ、何度も同じ場所を歩くことが続いた。訪れるなかで、戦前よりその土地に住まう夫婦の話聞くこともできた。戦争前後の移り変わり、かつては東京湾の潮風が香るまちだったこと、文化芸術のこと、住む家の前にとっても高い建物が建ったことに対する思いなど、とても貴重な話だった。

その話を伺った後、私たちは「よそ者」であること、そしてそのありかたをとっても意識

した。おそらく、彼らの「記憶」を次の世代である私たちが残していけたらよいのではと、そんな観念にかられたからかもしれない。

『だれかのみため 展示と実演』という企画が開催されることになったのはちょうどそのころで、研究室の活動のメインは、「土地の記憶」を素材にして徐々に作品に落とし込んでいくことにシフトしていった。発表作品はその土地になにかしら還元されるものではなくてはならないということをつねに、念頭に置いていた。

おそらく、それが「よそ者」としてできることなのではないかと、きつと感じていたのだろうと思う。「よそ者」という意識のありかたについて、南はこう記している。

私とホシさんは何者か。「よそ者」だ。私たちはどう頑張っても「よそ者」にしかたない。だからよそ者で探ろうとしている変質者。そして、この場所を昔から知っているような「よそ者」だと思う。

(二〇一四・六・九 南とも子 記録より)

伝えていくべき「記憶」と役割

作品にするにあたり、「記憶」をどう体感させることができるだろうか。そのことが一

番の問題となっていた。「記憶」というものは個々に感じるものであるので、読み取る方法もアウトプットの形態も、あらかじめこれだと決めるのではなく、試し探すことに注力した。

過去には未来はないが、過去にはヒントがある、忘れてはいけない大切なピースが含まれている……ということをも、私たちは前提として感じていたのだと思う。私たちよりさらに上の世代の人々が残してくれた欠片は土地のどこかに生き、そして時とともに忘れられようとしていることに、なにかしらの危機感を覚えていた。それは仕方のないことだけれど、なんらかのかたちで思い出したり後世へとつないでいかなければならないのではないか。それを担うのは作品やメディアなのかもしれない（もちろん、必ずしもそうあるべきだというわけではないのだが）。その可能性を、おそらく研究所に参加した時点で互いに意識していた。

だからきつと、なにかしらの作品やメディアになることで、「記憶」が伝達しやすいかたちにならないかということも試みたのだと思う。その土地でプロジェクトを遂行する今と昔そして未来のつなぎ手として。様々な土地がそれぞれ持つ「記憶」を読み解きつなぐための一つの方法として。そのため、『展示と実演』では、ラジオと新聞という架空のメディア形態をとったのだった。



伝えたいという思いばかりが先走り、無理やり詰め込み、あまりに一方的で押しつけ気味なやりかたになってしまい、結果としては作品という形態にこだわりすぎ、伝わりにくいものになってしまったのだが……。だれのために、なにをどう伝えたいのか……。その目的がしっかりしていなければ伝わるわけもないのだが、そんなことにも気がつけないほど、なにかしらの強い問題意識に苛まれていたのかもしれない。

このときの失敗の「記憶」があり、以前より、引いた目線で見ることができるようになってきたように思う。試すということができる環境が与えられた研究所での「時」はこれからの糧になっていくのかもしれない。

ここまで活動してきたが、足で立っているその土地の見えない部分を読み解き、どう「記憶」をアウトプットし伝えていくことがよいのか、そしてどう土地を生きるものたちに還元していけばよいのか、いまでも答えは出ていない。

出会った土地には未だに不定期ではあるが足を運んでいく。住まう場所ではなくなくていく地のこれからを見続けたいという思いもあるが、まだ還元という意味で答えが出ていないこともある。これからもその答えを見つけるため、過去から現在、未来へ向けて、記憶をめぐる旅はまだつづけていく。きつとまたどこかで。